



## 〇「主体的学習者とは ～3観点から考えてみる～」

新学習指導要領の施行に伴い、令和4年度から高校にも導入された観点別評価。学習状況を3つの観点に分けて評価するものですが、今年度は全学年で行っています。いわゆる3観点とは、資質・能力の3つの柱である「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」です。



では「思考力、判断力、表現力」などは、そもそもどうすれば育てられるのでしょうか。平成20年の中教審答申などからひも解けば、次の6つの学習活動が示されています。

- |  |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>①体験的活動から感じ取ったことを表現する</li> <li>②事実を正確に理解し、伝達する</li> <li>③概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする</li> <li>④情報を総合的に分析・評価し、論述する</li> <li>⑤課題について、構想を立てて実践し、評価・改善する</li> <li>⑥互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる</li> </ul> |
|--|

総合的な探究の時間では、これら全てが意識されていると感じるかと思います。松江東高校では総合的な探究の時間の単元に「MATSUE 探究」があります。地域課題をテーマにしたのは、疑問やジレンマが生まれやすく、また教師と生徒、そして生徒相互も課題感を共有しやすく、テーマも焦点化しやすいからです。教科学習の内容、多くの社会的事象や出来事は、普段の生活とは関係ないか大人社会のものだと捉えがちで、教科学習は試験に向けた知識の習得で十分と思いがちです。しかし、教科学習においてこそ、6つの学習活動を意識することが重要で、学力向上、さらには生きる力にも密接に関係します。

変化の激しい現代社会では、グローバル化が進み、多種多様な価値観が認められる多様性社会となっています。そのため物事を進める際は、決められた絶対的な目標ではなく、みなが納得する目標が必要となります。その納得解を導き出すために、幅広い知識と柔軟な思考力に基づく判断力、その考えを表現する力が個々に求められています。この資質・能力は、知識が陳腐化していくスピードが早い現代社会においては、陳腐化しないレベルに知識レベルを上げようとする主体性と能力が必要だと考えています。

知識レベルとは何か。専門が日本史なので、小学校でも習う太閤検地を例にとると「秀吉のおこなった検地を何といいますか?」という質問に「太閤検地」と答えるのは、知識でも低次の記述的知識、つまり覚えているか書けるかどうかのレベルです。記述的知識のままでは、「太閤検地の目的と同じ目的で秀吉が出した法令は何ですか?」という質問には対応できません。答えは「刀狩り令」です。この答えが出せるのは説明的知識として太閤検地と刀狩りの内容を理解しているからです。太閤検地は、収入の安定と兵農分離をすすめ、刀狩り令では農民の検地に反対する一揆の防止と農業への専念を強制しました。これを、兵農分離の意義まで含めて答えるレベルが概念的知識です。事柄の「共通性や特殊性」を見出すことができる一般的理論(概念)は、ジレンマや疑問・問いが学習者側にないと獲得できません。それには主体性が必要不可欠です。さらに「太閤検地の歴史的意義は何ですか?」という問いには、より上位の価値判断的知識が必要です。記述的知識や説明的知識という土台としての知識を堅実な学習でしっかりと固め、その上で主体的な学習姿勢により、思考・判断・表現を繰り返す中で、知識がより上位レベルに上がって行きます。最近の大学入試には上位レベルの知識がないと対応できません。

歴史上の出来事(=存在としての歴史)は無限であって、多く知っていることに本来あまり意味はありません。つまり、歴史は暗記物ではありません。歴史(=認識された歴史)は、現在の時点に立って過去の重要な出来事に意味づけを与え、そうした過去との関係において、現在・未来に対する確かな理解と展望を得るためのものです。“主体的に現代を生きる”ためには価値判断的知識レベルが必要なのです。

3観点で示される3つの資質・能力を学習等で高めていくことは、学力を高めるとともに、結局は変化の激しい現代社会において、流されずに主体的に生きていく力、生きる力を養うことでもあるのです。